あとがき

今回はヘンリー・ムーアHenry Moore（1898-）の彫刻展である．近作（1975-84）によるブロンズ12点の展示で小品が主体となっている．一昨年，この展覧会を計画したが事情があり果たさず，今回ようやく実現をみることとなった．私としては一度ぜひやってみたいと念願していた展覧会だけに大変うれしいのである．

私の友人，それもごく一般の，現代美術にはどちらかというとナジミのない友人にヘンリー・ムーアという彫刻家の名前を知っているか？ときくとだいたい知っていると答える．これはわが国において，英国生れのこの作家が世界的な現代彫刻家として思いのほかよく知られていることを示している．今，一寸，私の頭に浮かんでくるムーア所蔵の美術館の名前を挙げてみると，宮城県，いわき市，ブリヂストン，彫刻の森（箱根），MOA（熱海），山梨県，富山県，国立国際，兵庫県，大原，広島市等々その数は多い．山梨県の美術館はミレー等のバルビゾン派の作家の収集で有名であるが，その前庭にムーアの優品がある．ロダンやマイヨールでなくムーアであるのがいい．光琳の紅梅，白梅の所蔵で有名な，熱海のMOA美術館には相模灘に向かって「王と王紀」の優品が端然と座っているのは鮮烈な眺めである．ともに現代美術専門の美術館ではないが，多くの人々が集まる美術館であるのは面白い．つまりムーアの作品をわが国では多くの人が見る機会が多いのである．知名度の高い所以であろう．

H・ムーアの彫刻に接して私が心を打たれるのは，彼の作品に大きな包容力でつつまれた「温かさ」を感ずるからである．現にわれわれが生きているこの時代は多くの価値観が共存し，その表現手段も多岐にわたり，混迷混沌の状況である．このなかでムーアは一貫して人間の生命，根元的なものをゆったりと包み込む仕事を彼の手でなしとげてきたといえる．混迷した状況のなかで生きているわれわれがともすれば忘れがちな，しかし一方ではそれ故に秘かに希求しているヒューマンなもの，根元的なものをおおらかにどっしりした表現でみせてくれるのが，ムーアの作品である．そこに私は最大の魅力を感じている．ラヴリィとしか言いようのないムーアの小品をじっとみていると，それはだんだんと大きなものにみえてくるから不思議である．ヘンリー・ムーアの大作家たる所以であろう．

最後にこの展覧会開催のためにジョアン・ムーガ氏Juan de Mugaから絶大な御協力を得た．厚く感謝の意を表するものである．

1985年5月10日

佐谷画廊　佐谷和彦